

# ミス

ファッション●  
**花のある暮らし**

どこかロマンティックに／美しい日本の服

美容●  
ビューティカウンター利用術

別冊付録●  
ゴルフウェア  
春夏コレクション

## 花の旅

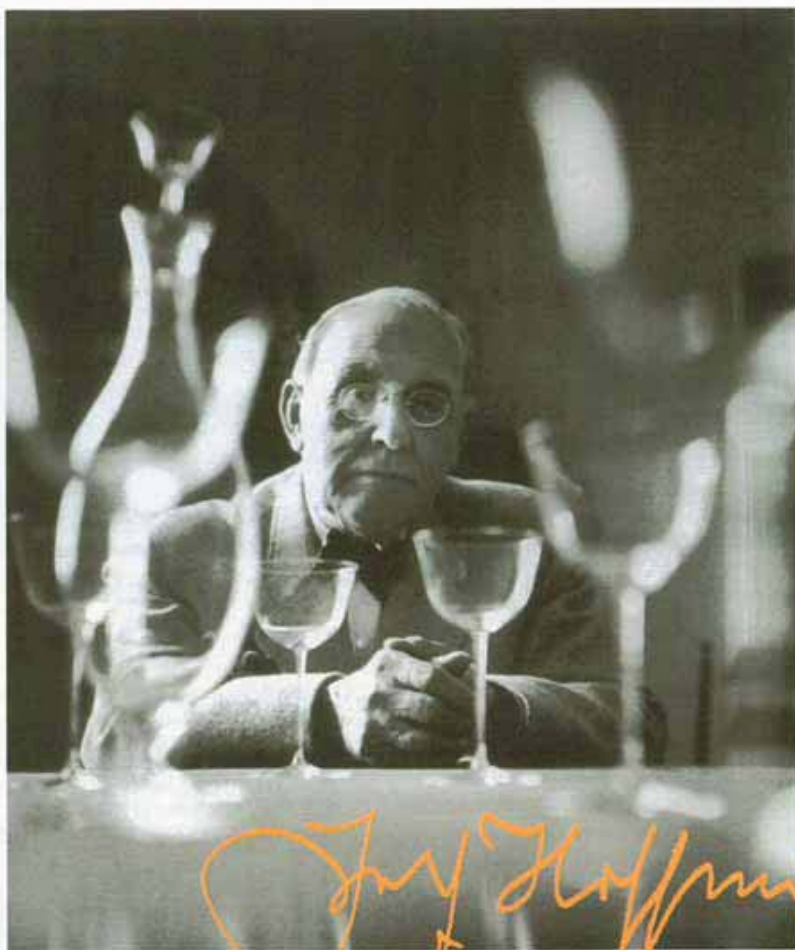
南仏へ  
京都でお花見  
奈良・室生の花守

## ウィーン

旅●モーツァルト、ヨーゼフ・ホフマン

料理●ホルトハウス房子さんの春ごはん／ごま料理、今昔

子どもと始める習い事／桐島かれん 家族のいる風景／鶴見和子／ジェームズ・ダイソン／山本理顕



Part 2  
Josef Hoffmann

## ヨーゼフ・ホフマン

### 20世紀のモダンデザインの先駆者

現代でいう、デザイナー集団「ウィーン工房」をコロマン・モーザーとともに1903年に設立し、モダンデザインの先駆者として活躍したヨーゼフ・ホフマン。家具、装丁、照明器具、衣装など幅広い分野で多彩な才能を発揮した彼のデザインは今もウィーン伝統あるブランドが復刻し製品化しています。

上の写真は、1917年に自らデザインしたロブマイヤーの「パトリアン」のグラスとヨーゼフ・ホフマン。1955年。

取材協力・ウィーン代表部 / 資料協力・ロブマイヤー J.&L. Lobmeyr、バックハウゼン Backhausen、ヴィットマン Wittmann

## 日常の芸術家 池内紀

写真で三つ。ヨーゼフ・ホフマン作の建物と椅子とナイフ・フォークの一式をながめると気がつく。よけいな装飾をみせず、簡素な抽象性という点で共通している。といって機能一点ばりの無機的なものでもない。現代にそのまま通用するモダンさの一方で、ある時代に特有の優雅さを感じさせる。雅やかな審美性といったもの。

それ以上に、建物と椅子と食卓用具一式が、同じひとりの人の作というのが目をひくだろう。さらに三つにかぎったままで、実際はずっと多い。ヨーゼフ・ホフマンはプローチやネックレスのデザインをした。ランプや壺、戸棚などもこしらえた。革製の名刺入れやハンドバッグ、ガラス細工。さらに共同住宅の設計から、町の一区画全体にわたる都市改造を手がけた。

建築家、工芸家、照明デザイナー、陶芸家、皮革職人、ガラス細工師、装頓家……それらを一身に兼ねていた。といって才にまかせて何であれ、やってみた、というのではない。ある時代の考え方、一つの理念にもとづいている。生活のすべてにわたる「日常の芸術家」であること。ヨーゼフ・ホフマンは理念をあざやかに作品にした。

ウィーン美術学校建築科を出て、イタリアに留学。ウィーンにもどったのが一八九六年、ホフマンのめざましい仕事が始まるのは、これ以後のこと。おりしもウィーンではクリムトを中心として分離派が誕生した。数多くの分離派展のうち、一九〇二年の第一四回展がとりわけ有名である。会場全部がベートーヴェンに捧げられ、クリムトの代表作の一つ、「ベートーヴェン・フリーズ」もこのときに生まれた。

ヨーゼフ・ホフマンが会場設計をした。壁の色調から照明一切をデザインして、展覧会そのものが一つの総合芸術品であるという構成だった。会期が終わると、どうなったか？ 他の芸術家たちの作品はアトリエや美術館や収集家のもとに移ったなかで、ホフマンの苦心作は、次の展覧会のために、きれいさっぱり取り払われた。

ウィーン工房の経過にもホフマンの考えが見て

1870年

モラヴィア(現・チェコ共和国)のブルトニツェで生まれる。

1892年

ウィーン美術学校に入学、オットー・ワグナーの指導を受ける。

1903年

コロマン・モーザーとともにウィーン工房を設立。家具、金銀細工の製作所を持つ。

1904年

ウィーン近郊の町、ブルカースドルフにサナトリウム(療養所)を建てることを企業家のヴィクトリア・ツッカーカンドルから委託される。建物の設計はもちろん、玄関の扉、照明、家具に至る内装デザインをすべて担当。この時期の代表的な作品となる。

1907年

自ら設計のキャバレー・フレデーマウスが新築ビルの地階に完成(フランス、ドイツと流行した芸術キャバレーブームがウィーンに伝播)。内装デザインには、ホフマンを中心にクリムトやコシユカなどが参加した。

1910年前後

テキスタイルのデザインを次々に手がける。モード部門も開設される。

1911年

代表作、ブリュッセルのストックレー邸が完成。建物内外の装飾にクリムトをはじめ、多くの芸術家が参加する。

1915年前後

ガラス製品のデザインを手がける。

1930年前後

陶磁器のデザインを手がける。

1932年

ウィーン工房解散。

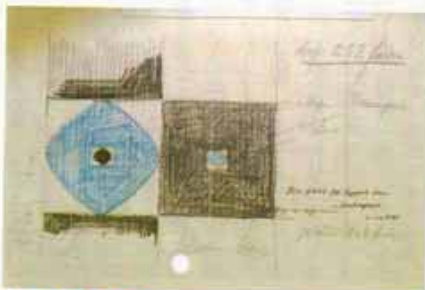
1956年

ウィーンで死去。



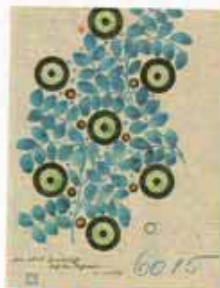
1904

ホフマンの代表的建築、ブルカースドルフ・サナトリウム。約10年前に復元、修復された。いすの張り地はバックハウゼンで、今年新しく復刻された柄。



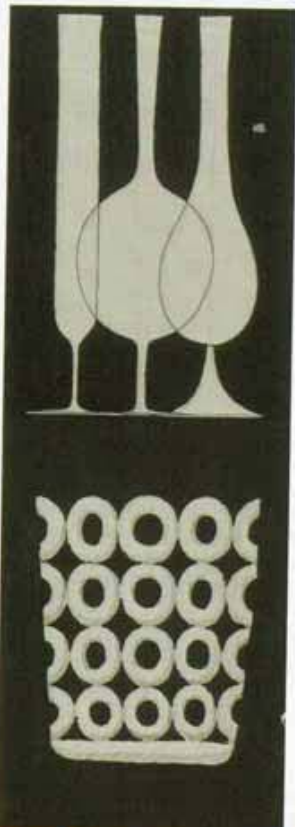
1907

キャバレー・フレデーマウスの店内に敷かれたカーペットのデザイン画。



1910

ホフマンが得意としたテキスタイルデザインの一つ。今年バックハウゼンで新たに復刻。



1915

上はロブマイヤーに保管されたデザイン画。花瓶は、2003年に限定180個で復刻。

とれる。金属や皮革、家具といった部門に加えて、絵葉書シリーズの制作をとり入れた。絵葉書なら安く作れるし、ひろくいきわたる。無名の画家たちの作品発表の場にもなる。若いシレーはまず絵葉書で才能を発揮した。

ウィーン工房はまた印刷と出版に力をそそいだ。二〇代はじめのコシユカの詩画集「夢見る少年たち」といった傑作がここから生まれた。

どの場合にもヨーゼフ・ホフマンは裏方であり、産婆役だった。よく気のつくマネージャーをつとめた。そのかたわら、工房のあらゆる分野にわたって制作した。プローチや名刺入れまで含めると、総数で数千点にのぼる。作品目録にしばしば「ホフマン作?」とあるのは、記録されていないからだ。作品自体が語ればよいのであって作者が出るまでもない——そんなふうを考えていたのではなからうか。

これほどの作品を生み出したのに、これほど言葉において寡黙だった人も珍しい。三七年間にわたりウィーン工芸学校の教授であったが、ヨーゼフ・ホフマンは一冊の著書も残していない。

ウィーン工房の、また工芸学校の同僚だったコロマン・モーザーとホフマンを劇画風に描いたペン画がある。「似合いの御兩人」といいながら、ブツクリした肥満型と痩せ型、山高帽と中折れ帽、黒いマントと白いマント。一時代のウィーン文化を美しくいるどった二人である。

モーザーは通称「コロロー」だった。コロマンの愛称だが、どこかお断りの魔女が口にする呪文のようだ。ホフマンは「正方形(クワッドラート)の先生」とよばれていた。デザインに方形を好んだからだだが、いま一つには、小学生が使うような線入りの方眼紙を愛用したせいである。線入りの紙がされると、助手たちは一目散に近くの文房具屋に走っていった。

いけうちおさむ  
1940年、兵庫県生まれ。  
ドイツ文学者、エッセイスト。  
旅と温泉が大好き。  
主な著書に『ウィーンの世紀末』  
(白水社)、『森の紳士録』  
(岩波新書)、訳書に  
『ファウスト』(集英社)、  
『カフカ小説全集』(白水社)  
など多数。



# 照明

## ヴォカ・ランプス・ ビエンナ

WOKA Lamps Vienna

1978年に創業の照明器具のメーカー。オーストリア・ハンガリー帝国時代に照明器具の製作にあたった工場から、鋳型、丸鋸などの道具や機械を受け継ぎ、ウィーン工房デザインの照明器具の製作を認められる。ウィーン工房時代と全く同じ手法で手作業で仕上げて再現。また、ヨーゼフ・ホフマンとウィーン工房のオリジナル作品のコレクションも所有している。写真はブルカースドルフ・サナトリウムのために製作されたもの(1903年デザイン)。982ユーロ。



# テキスタイル バックハウゼン

Backhausen interior textiles

1849年創業のテキスタイルメーカー。ハプスブルク家御用達の称号を持つ。1869年以降、国立歌劇場、市庁舎、国会議事堂等多くの重要な建物の内装を手がけ、20世紀初頭はウィーン工房のテキスタイル生産を担う。写真中央は“Kunstschau”(1908年デザイン)。1908年にウィーンで開催された総合芸術展「クンストシャウ」のために製作された。左は“Lilien”, 右は“Paradies”(1908年デザイン)。1メートル13,440円から。

さまざまなものをデザインしようとしたことは、イギリスのウィリアム・モリスを中心としたアーツ・アンド・クラフツ運動からの影響でした。

ヨーゼフ・ホフマンによるデザインは、いわゆるアール・ヌーヴの流れるような曲線というよりは、むしろ抑制された曲線、あるいは時として直線的な装飾をもちいています。けれども、そのいくつかの椅子のデザインを見てもわかるように、一九世紀後半に広がったネオ・バ

ロックやゴシック・リバイバルなどはちがった、まったく新しいデザインです。彼らは、ガラスゴ-のチャールズ・レニー・マッキントッシュのデザインからもインスパイヤーされていました。

面白いのは、ホフマンのアーム・チェアが背もたれの角度を調整する仕掛けがなされていたり、なかなか機能的に考えられていることです。

装飾を取り払って、骨組みを明確にしていこうと、その後のモダンデザインでは推進されました。そうした意味では、ホフマンのデザインは、骨組みを明確にはしていますが、特有な装飾を施しています。そこが、ハードなモダンデザインとはちがって、どこかにしたしみやすさを感じさせるのです。ときとして、ハードなモダンデザインは虚無的な印象を与えますが、ホフマンのデザインは、静かな装飾でありながら、華やかさや愛らしさを感じさせます。そのことは、照明器具やテーブルウェアなどに見ることができ

ます。

いまホフマンのデザインを見ると、二〇世紀初頭のウィーンの静かな装飾がそのまま冷凍保存されているかのように感じられます。

日本では一九二〇年代にウィーン工房が紹介されました。日本のモダンデザインのバイオニアの一人である木村一は直接ウィーン工房を訪ね、そこから影響されたことをうかがわせるデザインを残しています。残念なことに、古いものを残してこなかった近代日本の歴史の中で、木村のデザインは、いまやほとんど目にすることはできません。

# クリスタル ロブマイヤー

J.&L. Lobmeyr

1823年に創業のクリスタルとシャンデリアのメーカー。1835年にハプスブルク家御用達の称号を得る。ウィーン工房が1915年にガラス工芸部門を設けると、その協力製作者となる。創業当時より、鉛を使わないカリクリスタルを素材に、職人による宙吹きガラスの手法によって仕上げている。写真は“Hoffmann Serie B”(1914年デザイン)。ホフマンの代表作の一つで、オリジナルはニューヨーク近代美術館に所蔵されている。ワインデキャンター210,000円、ワイングラス42,000円、シャンパンカップ47,250円。



かしわぎ ひろし  
1946年、兵庫県生まれ。  
デザイン評論家、  
武蔵野美術大学教授。  
武蔵野美術大学卒業。  
著書に  
『日用品のデザイン思想』  
(晶文社)、  
『デザインの20世紀』  
(NHK出版)、  
『家事の政治学』(青土社)、  
『日用品の文化誌』  
(岩波新書)、  
『家具のモダンデザイン』  
(淡文社)など多数。





## バックハウゼン

Backhausen interior textiles

店の地下1階がウィーン工房博物館になっており、当時の見本帳やデザイン画約3,500点などが所蔵、展示されている。今年4月には241ページのデザイン画など、ホフマンのデザインのテキスタイルを8種類、新たに復刻し、日本でも販売される。

Schwarzenbergstrasse 10.A-1010 Wien  
Tel.+43-1-51404-0

9時半～18時半(土曜は17時まで)。日曜、祝日休み。  
<http://www.backhausen.com>

※日本でのお問合せ先は「マナトレーディング」  
東京都目黒区上目黒1の26の9 中目黒オークラビル4F ☎03-5721-2831 <http://www.manas.co.jp> 昨年12月にショールームがオープンしたばかり。

「フォルマ インターナショナル」バックハウゼンの生地を使ったハンドバッグなどの小物を販売。

☎03-3912-4073



## ヴィットマン

Wittmann Möbelwerkstätten

5年前にオープンしたショールームには、ホフマン・デザインの家具ばかりを集めた空間も。今年は没後50年を記念して、ホフマン・デザインの商品が新しく販売される予定。ソファベッドの技術に定評があり、その機能と種類の豊富さにも驚かされる。

Friedrichstrasse 10.A-1010 Wien

Tel.+43-1-585-7725

10時～18時半(土曜は17時まで)。日曜、祝日休み。

<http://www.wittmann.at>

※日本でのお問合せ先は「hhstyle.com 原宿本店」 ☎03-3400-3434 <http://www.hhstyle.com>



## ヴォカ・ランプス・ビエンナ

WOKA Lamps Vienna

自らデザイナーであり、アンティークの専門家でもあるオーナーが親切に接客してくれる。2階建ての店内は、多くがホフマン、コロマン・モーザー、アドルフ・ロース・デザインのもの。ホームページに日本の取扱店を掲載。インターネットで注文も可能。納期は4～8週間。

Singerstrasse 16.A-1010 Wien

Tel.+43-1-5132912 10時～18時(土曜は17時まで)。日曜、祝日休み。 <http://www.woka.com>



## アウガルテン

Augarten Porzellanmanufaktur

写真は、かつてハプスブルク家の狩猟用の館だったアウガルテン宮殿にあるウィーン磁器工房アウガルテン。工房内1階にショップがあり、工房ならではのセール品や掘出し物に出会えることも。工房の見学は予約制。

Obere Augartenstrasse 1.A-1021 Wien

Tel.+43-1-21124-200

9時半～17時。土曜、日曜、祝日休み。

また、市内中心部に路面店もある。

Stock im Eisen-Platz 3.A-1010 Wien

Tel.+43-1-5121494

10時～18時(木曜、金曜は19時まで)。日曜、祝日休み。 <http://www.augarten.at>

※日本でのお問合せ先は「アウガルテン ジャパン」 ☎03-5226-5881 <http://www.augarten.naruhodo.com>



## ロブマイヤー

J.&L. Lobmeyr

シャンデリアの製作は現在でも行なわれており、シェーンブルン宮殿、ウィーン国立歌劇場など、ウィーンの主要な建物で見ることができる。2階は博物館になっており、デザイン画や創業時からのオリジナル製品が並ぶ。

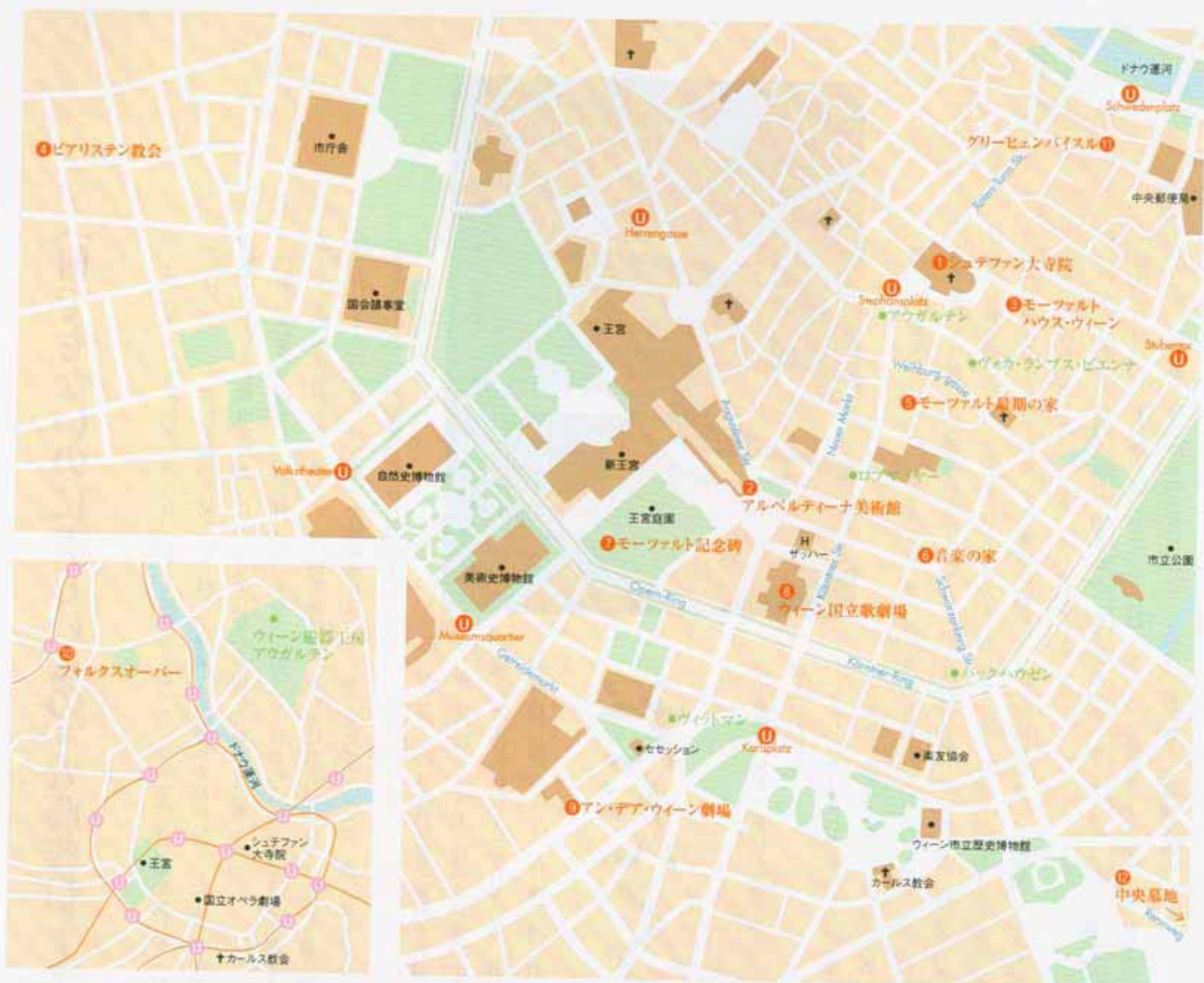
Kärntnerstrasse 26.A-1010 Wien

Tel.+43-1-5120508-0 10時～19時(土曜は18時まで)。

日曜、祝日休み。 <http://www.lobmeyr.at>

※日本でのお問合せ先は「ロシナンテ」。ショールームあり。東京都港区南青山4の11の14 ロブマイヤー・サロン

☎03-3423-4552 <http://www.lobmeyr-salon.ecnet.jp>



## ウィーン工房の作品に出会えます。 展覧会「ウィーン展 華麗なる美術と音楽のしらべ」

19世紀半ば、オーストリアの皇帝フランツ・ヨーゼフ1世によって環状道路(リングシュトラッセ)が建設され、通り沿いには国会議事堂、市庁舎、国立歌劇場、楽友協会ホール、美術館、博物館などの主要な施設が次々に建てられた。ウィーンはかつてないほどの繁栄と栄華を享受し、社会が飛躍的に発展した。この時代を中心に華やかな宮廷文化を物語る食器、家具、世紀転換期の美術を展示する。同時代の作曲家の直筆の楽譜や舞台デザインなど、音楽やオペラに関連する資料や、世紀末美術の代表的な画家クリムトやシーシンの素描、ホフマンをはじめとするウィーン工房の作品も紹介。小さな日用品に至るまで、その美意識の高さをうかがい知ることができる。

●6/5まで「島根県立石見美術館」10時～18時半(展示室への入場は18時まで)。火曜、3/22休館(3/21、5/2は開館)。観覧料1,000円。島根県益田市有明町5の15 ☎0856-31-1860 <http://www.grandtoit.jp/>

関連企画として、3/21にNHK東京児童合唱団公演、5/13にウィーン少年合唱団公演、4/1に池内紀さんと山本容子さんのトークショーがある。

a. 食卓用センターピース。銀、象嵌加工。1908年ごろ。b. 砂糖入れ。銀、象嵌加工。1906年ごろ。c. 花入れ。銀。1906年ごろ。d. 帝国印刷局のいす。カシワ材。1907年。

すべてヨーゼフ・ホフマン作。a～cはウィーン・ミュージアム所蔵(©Wien Museum)。dはウィーン家具保管美術館所蔵(©MM D-Museen des Mobiliendepots Wien)。



a



b



c



d